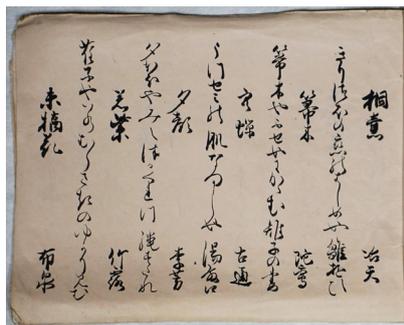




## 広まる源氏物語の世界

多くの人々を魅了し続けてきた紫式部による古典文学の傑作、源氏物語。いかにして、今日まで受け継がれてきたのでしょうか。

江戸時代は源氏物語文化が彩り豊かに花開いた時代でした。源氏物語は、それまで一部の知識人しか目にする事ができませんでした。絵入りの版本や注釈書の版本が多く出版されたことで、人々が物語に触れ、その内容を共有できる環境が整えられ、一般民衆層にも広く普及しました。さらには、美術・芸能など様々な分野にもそれまで以上に取り入れ



写真①「源氏俳諧の句集」(部分)(個人蔵)

られました。

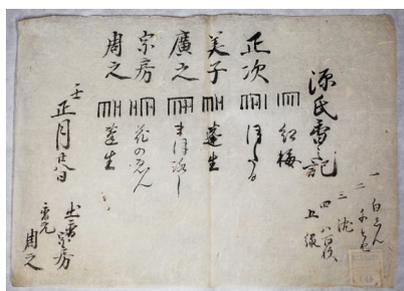
俳諧もその一つです。俳諧は、和歌の強い影響を受けた連歌から派生したため、和歌と親和性が高く、俳諧に携わる者にとって、優れた和歌を収める源氏物語は必須の教養となりました。

彦根藩士や城下の町人からなる彦根俳壇の俳人たちが、珍しい源氏物語の版本を手に入れたことをきっかけとして元文二年(一七三七)に開催した俳席の一句(写真①)を見てみましょう。

源氏物語の箒木巻にちなんだこの句は、空蟬から光源氏への返歌「数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる箒木」を念頭に置いたものといえます。この俳席に参加した俳人たちは、もとにした各巻の和歌を踏まえ、それぞれが詠んだ句を賞翫したのでしょうか。このように物語の内容を知っていることにより、人々の日常はより豊かなものとな

なったのではないのでしょうか。

帖数など源氏物語を構成する要素が他分野に取り入れられる場合もありました。その一例が源氏香です。源氏香は数種類の香をたき、その名を言い当てる組香の一つで、五種の香を五包ずつ用意し、そのうち任意の五包を順にたき、その香りを聞き分けて図示するものです。図示する際は、縦棒五本を引き、同じ香であれば、上部を横棒でつなぎます(写真②)。図形は全部で五十二種類あり、源氏物語の五十四帖と数が近いことから、初巻と終巻を除いた巻名



写真②「源氏香之記」(当館蔵)

があてられています。さらに、この図形は服飾や和菓子などに意匠として広く取り入れられました。

もともと各々の図形と各巻の内容は無関係でしたが、各巻の内容を象徴的に表した趣意絵や代表的な場面を描いた浮世絵が図形に添えられるようになり、次第に各図形は源氏物語の各巻を象徴的に示す印となりました。源氏香の参加者は、聞香を楽しむとともに、各図形に当てはめられた各巻の場面にも思いをはせたのでしよう。

このように、源氏物語の世界は、江戸時代を通じて、多様な分野に広がり、人々の間に定着していく過程を経て、現在に受け継がれてきたのです。

【彦根城博物館学芸員 柴崎謙信】

写真①・②の資料は、常設展示「古文書が語る世界」で6月20日(木)～8月27日(火)の期間、展示します(期間中無休)。